

ペスタロッチャー教育賞 受賞者紹介

Oishi(おおいし) おおいし ゆきこ
サポートセンター代表 大石 由紀子 氏

1939年愛知県生まれ。愛知県立時習館高等学校卒、岐阜大学文学部英文学科卒。日本画家としても知られる。1960年代末頃から個人的に、また2000年から2016年までは保護司および国際保護司（フィリピン）、法廷通訳として、さらに2000年以降、現在に至るまで「Oishi サポートセンター」の代表として、さまざまな国内外のネットワークをいかして、兵庫県のみならず、フィリピンやタイの貧しい子どもたち、女性たちへの人道支援を継続的に実践してきた。

大石氏は、英語教員をしていた経験を生かし、1965年から兵庫県の自宅で英語教室を開くかわら、外国人を中心に売春や性犯罪で苦しむ子どもや女性たちのケアと支援を行ってきた。そのきっかけとなったのは、英語教室で出会ったある家族であった。ある日、英語教室の月謝が滞ったフィリピン人児童の自宅を訪問したところ、母親が貧困から売春で生計を立てていたことを知り、母親の代わりに市に生活保護を申請した。以降、自宅を拠点に個人による活動ではあるものの、「Oishi サポートセンター」という名称を用いて、貧困から売春を強要される外国人女性やその子どもたちの支援を続けた。1996年には、フィリピン・ケソン市の女性自立支援プログラムに参加し、売春に頼らぬ生活手段として少額融資ローンを設立した。1998年には、タイの首都バンコクから600キロ離れた政府の支援もなかなか届かないチャペン村で、貧困のせいで教育を受けられなかった人々のための「生き直し学校」建設の支援を行った。2000年には「売春宿や日本に売春婦として送り込まれる子ども」を救いたいという思いから、犯罪や非行によって保護観察を受けた者に指導・助言を行い、更正を手助けする保護司の資格を取得後、自宅で「Oishi(おおいし) サポートセンター」を正式に設立した。その後、人身売買の世界顧問議会バイタルボイスで初の日本人メンバーとなり、国連アジア極東犯罪防止研修所メンバーにも就任した。

その活動の一環でフィリピン・モンテンルバの少年院を訪れた際、犯罪組織に売り飛ばされ、麻薬密売やスリに関わった少女たちと対面した大石氏は、「お金が欲し

い」とあどけない顔で迷わず訴える子どもたちの姿に胸を痛め、帰国後、在大阪米国総領事館で講演を行い、われわれ日本人の人権意識の向上や人身売買の撲滅、少年犯罪の防止や被害女性の自立支援の重要性を訴えた。「夢を持つことが何かを得る手立てになる」と売春や犯罪に関わった子どもたちの更生を訴え、国内はもとより海外でも積極的な活動を展開し続けた大石氏は、2006年には米誌・ニューズウィークの「世界が尊敬する日本人100人」にも選ばれた。同誌に取り上げられたのは、支援した子どもたちが「由紀バアチャン、ありがとう」と投稿したことがきっかけだったという。

大石氏は、性被害者の支援を積極的に行う中で、いじめ・不登校・虐待・体罰などの相談も受けるようになり、困難を抱えた子どもやその家族を各関係機関の支援につなぐなど、これまでに数千件におよぶ子どもたちの深刻な課題に対応し、彼らの心のケアを行ってきた。また、「暴力によらない教育」「命を大切にす教育」「兵庫の教育を考える」など多数の講演会等で講演も行っている。これらの活動はすべて大石氏の個人的活動として行われており、経費もまた自己負担で賄ってきた。

2007年および2010年に近畿地方保護司連盟会長表彰、2015年に日本社会貢献支援財団賞、2017年に東久邇宮国際文化褒賞、2018年度に山上の光賞（NPO・ボランティア部門）、産経市民の社会福祉賞、兵庫県社会賞を受賞した。

極めて困難な状況にある人々が受けた被害を直接的に支援するのみならず、彼らの回復を目指して、性犯罪被害者やいじめや虐待等を受けた子どもへの心のケア、今後の生活を支えるための公的保護施設や支援施設への仲介、そして人身売買撲滅のために身を粉にして奮闘する大石氏の活動は、道徳的、心理的な支援を行い、子どもたち自身の生活を支えるのみならず、人間の尊厳を守る社会への改革を目指したペスタロッチャーの精神に繋がる。氏の長年の努力と功績に対し、第28回ペスタロッチャー教育賞を贈呈し、心からの敬意を表すと同時に高く顕彰したい。